

塞ノ神について

令和三年一月二〇日於加茂法話会

賽の神まつり(どんと焼き) さぎちやう 【三毬杖・左義長】

小正月に行われる「火祭り」竹、藁、杉、松、豆がらなどで作った、やぐらや小屋に火を付けて燃やし、神様を空に送る行事である。正月の飾りなどを燃やす、その火で餅やするめを焼いて食べると一年無病息災で過ごせるという。

三毬杖陰暦正月に行う火祭りの行事。「毬杖(ぎつちやう・槌の形をした杖に糸糸を巻きつけて飾った遊び道具、特に正月の遊び、玉打ち)」を三本立てたことによるという。宮中では、正月十五日および十八日に清涼殿の南庭に青竹を三本束ね立て、天皇の書き初めや短冊・扇子などを結びつけ、陰陽師などに歌いはやさせて焼く。民間では、多くは十五日に長い竹を数本立てて、門松・しめ縄・書き初めなどをもち寄って焼く。その火にあぶった餅を食べると病気にかからないという。どんと「さぎちやう」とも《日本語での特別な意味》陰暦一月十五日に宮中で行われた悪魔を払う。火祭りの儀式。▽民間で行われる「どんと」に伝承されている。《同義語》左義長どんと(尊さ)、法成就(ほうじょうじゆ)「穂出やれ」左義長(さぎちやう)古い信仰で、正月と盆は荒々しい靈魂を追い退ける目的で火祭りを行う。その起源は中国の爆竹。名義に関する事、後漢の明帝の永平十四年(七十一年)佛教と道教の優劣を競い、右に道教左の仏教の經典を於い焼いた所、道教は灰に仏教は燃えなかった左の義(正義・よい)長ぜり(優れている)さぎちやう

徒然草「法成就の池にこそとはやすは神泉苑の池をいう」左義長のはやし言葉「東土哉・東土哉」(トウドヤトウド) (尊や尊) これは三毬杖が行われた神泉苑の池で、昔弘法大師が雨を祈って法力を顕したものである。火、爆竹の音、竹の割れる音、荒々しい靈魂を追い払う優れたこと(ドンと尊い)祭り。

こがく かざん 五岳の霍山、はくろくざん 白鹿山の道士。ちよせんしん 椿善信、ひしゆくさいとう 費齋才等、永平十四年

(西暦) 六七年正月 十五日、白馬寺に集む。右に道經・子書・符術等を以つて。壇上に置く。左に舍利及び佛の經像を置き、時に佛舍利、五色光明を放ち。璉環して蓋の如く(玉の輪が傘のように)。遍く大衆を覆い。光、日輪を蔽(かく)す。摩騰法師は虚空に坐臥して。神化自在なり。天、寶花及天音樂を雨ふらす。竺法蘭は梵音もて讚歎し。明帝は大いに悦び。五品已上の公侯の子女及び陰夫人等を放ちて出家せしむ。道士六百人も佛に投じて出家す。國を擧げて佛教に歸依す。『歷代法宝記』

運歩色葉集・(うんぽいろはしゅう) は、室町時代に編纂されたいろは引きの国語辞典。天文十七年 (一五四八年) 約一七〇〇語を収録』

左義長(同) 一説曰白馬寺に於いて佛經をば左に置く、儒書をは右に置いて。試に火を放ちて焼く、左佛經は焼えず。故に法成就也。東土哉(トウドヤ)云々々唱也。「左の義、長ぜり(すぐれている)」東土哉(トウドヤ)・どんと焼き・塞ノ神・・・左義長とは、一月十五日の小正月に行われる宮中を起源とした火祭りです。

仏教の經典は黄色、柿渋が塗られて、燃えなかった。道教・儒書は白紙で燃えてしまった。東土哉(トウドヤ)・・・東方の国、心地よい。呪文

